

解説「E.FORUM スタンダード 国語科(第1次案)」について

八田幸恵(大阪教育大学・准教授)

はじめに

国語科の授業では何を教えることができるのかという問いをめぐるには、他教科や道徳との関係も含めて長いあいだ議論が交わされており、共通合意を示すことは難しい。ひとまず、学習指導要領や E.FORUM の参加者の実践、また国語科の教育目標に関する研究を踏まえて、試案を作成してみた。

ここから先では、「読むこと」領域の解説を行うことを通して、E.FORUM スタンダード全体の解説を行う。

1. 作品か読者か 両者の統合

学習指導要領の「読むこと」領域には、「作品を読むこと」に関する目標と、「読書主体を育てること」に関する目標という、大きく分けて二つの目標がある。前者はさらに、「登場人物の気持ちを理解すること」に関する目標と、「場面の関係を考え物語構造を理解すること」に関する目標に分かれるという¹。

「作品を読むこと」に関する目標と「読書主体を育てること」に関する目標は、切り離されているわけではない。2008年版学習指導要領においては、自ら学び、課題を解決していく能力の育成を目指して、「読むこと」を主体的な学習過程とみなすことを提案している。具体的には、指導事項を「音読」「解釈」「自分の考えの形成および交流」「目的に応じた読書」に分節し、「自分の考えの形成および交流」に関する指導事項を全学年に配置することで、「作品を読むこと」と「読書主体を育てること」を架橋しようとしている。ただし、形成された「自分の考え」の各学年段階の水準が示されているわけではない。

また、「作品を読むこと」に関する目標は、国

語科教育研究において様々に提案されてきており、たとえば「対比」「比喩」「類別」といった読みの方法（認識方法）が系統化されて示されてきた。しかしながら、教材（作品）に即して認識方法を指導する授業に対しては、読者不在になり、もともと子どもたちが持っている主体的で自然な読みを封じてきたという批判がなされる。ちなみに、物語構造のスキーマを指導する授業に関しても、同じ批判がなされる。そこで近年は、読書主体を育てることを原則とし、主体的な読みを充実・発展させるための読みの方法の指導が模索され始めている²。

このように、「読むこと」領域に関しては、作品中心主義と読者中心主義を統合し、新しい目標・評価基準（スタンダード）を構想していくことが喫緊の課題となっている。逆に言うと、そのような目標のあり方は、まだ十分に議論されているわけではないということである。

2. 文学の授業における「自分の考え」の形成

E.FORUM においては、パフォーマンス評価がまさに学習者の個性的なパフォーマンスを評価対象とすることから、「自分の考えの形成」を視野に入れた単元が多い。このことは、新しい国語科スタンダードづくりにとって貴重な財産である。しかしながら、E.FORUM フェスタの場では、特に文学の単元例に関して、この「永続的理解」は国語科の教科内容かという議論がしばしばなされる。

文学の授業では、教材内容・教科内容（読みの方法）・教育内容（人間観・世界観）が区別される。そして、教材を教えるにとどまってはいけないこと、国語科である以上は教科内容を教えること、教科内容・教育内容を教えるときに

は教材内容の理解が前提となること、そして教育内容を指導するときは必ず教科内容を含むことが原則とされる³。

このことを踏まえても、「自分の考え」を求める際は、個々の教材の読みにとどまってしまう危険性や、国語科の枠を大きく逸脱してしまう危険性があるだろう。

また、文学作品に対する「自分の考え」や「批評」を求める際には、「何でもあり」に陥らないために、直接的に登場人物を「批評」するのではなく、登場人物に対する「語り手」の「批評」を読むことで自分自身を「批評」することが提案されている⁴。

このように、文学の授業において「自分の考え」を形成することは、喫緊の課題であり非常に重要ではあるものの、未だ難題でもある。

3. 「読むこと」の包括的な「本質的な問い」

そこで、今回提案する E.FORUM スタンダードにおいては、包括的な「本質的な問い」を「読むとはどういうことか」とした。その意図は次の二点である。第一に、「読むとはどういうことか」という問いは、「作品を読むこと」に関する目標と「読書主体を育てること」に関する目標の両者を視野に収めることができる。つまり、その問いに対する「永続的理解」に、読みの方法への理解と同時に「自分の考え」を含むことができるからである。第二に、形成される「自分の考え」の内実を、言語文化に関する理解にある程度限定することができるからである。

包括的な「本質的な問い」を「読むとはどういうことか」と定めたとしても、毎單元この問いに従って学習を進めるのは現実的ではない。現実的には、單元デザインや教材によって、教材内容に重点を置いた問いを設定したり、教科内容である読み方に重点を置いた問いを設定したりすることになるだろう。「読むとはどういうことか」という包括的な「本質的な問い」は、

個々の単元の問いを考える際に立ち戻り、少なくとも教師にとっては常に意識される立脚点のように機能させるのが適切かと考える。

そこで、学年ごとの「本質的な問い」についてはあえて示さず、課題ごとの「本質的な問い」と「永続的な理解」を示すことにとどめた。また、課題は、読みの方法の指導と同時に「自分の考え」の形成を視野に入れたものを選んだ。

おわりに

今回の国語科スタンダード試案においては、包括的な「本質的な問い」と課題ごとの「本質的な問い」にかなりの距離があるため、スタンダード全体を眺めても、国語科の目標のすべてが網羅されているとは到底言えない。また、そもそも、読みの方法の習得と「自分の考えの形成」がどのように統合されていくのかは、まさに研究が始まろうとしているところである。今後、E.FORUM 参加者の実践をもとにしながら、議論を重ねていきたい。

<参考文献>

全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書、2013年。

¹ 寺田守『『読むこと』領域の学習指導目標を構造化する試み—登場人物の気持ちを理解する方法を中心として—』第125回全国大学国語教育学会広島大会 課題研究「国語科カリキュラムの再検討—読み・書きの将来と国語科教育の課題—」2013年。

² 鶴田清司による「解釈」と「分析」の統合という主張など。鶴田清司『<解釈>と<分析>の統合をめざす文学教育—新しい解釈学理論を手がかりに—』学文社、2010年を参照されたい。

³ 鶴田、前掲書。

⁴ 田中実・須貝千里『「これからの文学教育」のゆくえ』右文書院、2005年。